

装置を適用した。本症例ではロケーターアパットメントを用いたIODを選択することにより良好な維持力が得られ、原発巣の経過観察を行う上でも有効な治療法であった。

### 3. 歯科用コーンビームCTを用いた埋伏下顎第三大臼歯歯根の観察

Evaluation of the impacted mandibular third molars' root using dental cone beam CT

○池田 裕之介, 小川 淳, 泉澤 充\*, 高橋 徳明\*, 矢菅 絵里加, 古城 慎太郎, 川井 忠, 宮本 郁也, 藤村 朗\*\*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野\*, 岩手医科大学歯学部口腔医学講座歯科医学教育学分野\*\*

**目的:** 安全な抜歯の一助とするために、歯科用コーンビームCT (CBCT) を用いて埋伏下顎第三大臼歯の歯根形態を検索した。

**材料と方法:** 209名323歯のCBCTで歯根形態を評価後、同一歯のパノラマX線画像(パノラマ)を読影し、モダリティ間における診断の一致率を算出した。

**結果:** CBCTでは、歯根数は2根が73.4%と多く、次いで単根が13.6%、3根が3.4%の頻度でみられた。また、槓状根の頻度は7.4%、槓状根と過剰根の随伴が2.2%、90度以上の歯根湾曲が3.4%の頻度で検出された。CBCTとパノラマにおける診断の一致率は、単根が93.2%、2根が89.3%と高かったが、3根と歯根湾曲の一致率はそれぞれ9.1%と18.2%、パノラマでは槓状根と過剰根は診断出来なかった。

**結論:** 本研究により埋伏下顎第三大臼歯の歯根形態に関する詳細な知見が得られた。

### 4. 顎骨の保存的治療が奏功した小児下顎エナメル上皮腫の1例

A case of the childhood mandibular ameloblastoma that the conservative treatment of the jawbone succeeded

○石川 雄大, 川井 忠, 角田 直子, 小松 祐子, 小幡 健吾, 橋口 大輔\*, 泉澤 充\*\*, 武田 泰典\*\*\*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座小児歯科学分野・障害者歯科学分野\*, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座放射線学分野\*\*, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野\*\*\*

**緒言:** エナメル上皮腫は歯牙腫に次いで多い歯原性腫瘍で、発育は緩慢、自覚症状に乏しいことから広範囲に進展することが多いとされている。われわれは、顎骨の保存的治療が奏功した小児下顎エナメル上皮腫の1例を経験したので報告する。症例概要: 患者は9歳の女児、左側下顎の著明な腫脹と開口障害を主訴に当科を受診した。既往歴は、特記事項なく、体温37.3℃。口腔外所見は、開口量は15mm、左右非対称、知覚鈍麻症状なし、左頬部の腫脹、発赤、圧痛を認め、口腔内所見でも、左側下顎臼歯部に発赤、腫脹、圧痛が見られた。血液検査所見では、WBC、CRP、NEUTのそれぞれ高値を示しており急性炎症の所見だった。

**経過:** 初診日、入院時にセフメタゾール0.5g/dayを静脈内投与により消炎しつつ画像評価を行ったところ、単胞性の腫瘍性病変を認めた。入院5日目で消炎を確認し、生検と同時に開窓術を施行した。病理組織学的に単嚢胞型(内腔型)エナメル上皮腫の診断を得た。約1年が経過し、病変の縮小と下顎管との距離が確認されたため、全身麻酔下で顎骨腫瘍切除術を実施した。下顎左側第一、第二大臼歯は治療の過程で保存できなかったが、その後、下顎左側第一、第二小臼歯の萌出は進み、現在、口腔育成は小児歯科に介入してもらい、当科でも経過観察を継続している。腫瘍切除後1年9か月が経過し

ているが腫瘍の再発は認めない。

**考察:** 本症例は嚢胞形成性のエナメル上皮腫であったため、開窓術による減圧が奏功しやすかったと考えられる。そのため、腫瘍の縮小が促進され、また左側下顎小白歯部が正常に近い位置まで萌出できたと考えられる。下顎骨の成長のピークは15歳くらいまでと言われており、今後、再発の有無の確認と共に顎骨の成長についても経過を診ていく方針である。

**結論:** 顎骨の保存的治療が奏功した小児下顎エナメル上皮腫の1例を報告した。現状では再発は認められず、顎骨の成長異常は見られない。今後も経過を診ていく必要がある。

5. 呼吸器疾患患者の周術期口腔管理と術後肺炎の関連

Association between perioperative oral management and incident of postoperative pneumonia in patients with respiratory diseases.

○大石 泰子, 阿部 晶子, 佐藤 俊郎,  
佐藤 華子, 杉山 由紀子, 重枝 弥\*,  
岸 光男

岩手医科大学歯学部口腔医学講座予防歯科学分野, 岩手医科大学医学部呼吸器外科学講座\*

**目的:** 岩手医科大学附属病院呼吸器外科において歯科スタッフによる周術期口腔管理の効果を検討することを目的とした。

**方法:** 調査対象は、本学附属病院呼吸器外科で呼吸器疾患の予定手術を受けた患者とした。研究デザインは前後比較研究で、前後比較して効果を検討した介入は周術期口腔機能管理とした。主要アウトカムは術後肺炎発症の有無、二次的アウトカムは手術後の在院日数とした。介入前1年間に入院した患者を介入前群(対照群)、介入開始から1年後まで、2年後まで、3年後までをそれぞれ介入1~3年目の介入群として、対照群と介入群のアウトカムを比較した。肺炎発症率の比較にはカイ二乗検定、平均在院日数の比較には一元配置分散分析 Dunnett の t 検定による多重比較を用いた。本研究は岩手医

科大学歯学部倫理委員会の承認(#1323)を得て行った。

**結果:** 患者総数は675名(介入前138名、介入開始後3年間合計537名)であった。術後肺炎発症率は介入3年目が2.7%であり、介入前の8.7%に比べて有意低かった。また、術後の平均在院日数は介入2年目が8.0日、介入3年目が8.1日であり、介入前の10.9日に比べ有意に短縮されていた。

**考察:** 周術期口腔管理の歯科の介入開始から介入2年目及び3年目に手術後の平均在院日数は有意に減少し、術後肺炎発症率は介入3年目に有意に減少した。在院日数の減少には第七次医療計画で在院日数の減少が目標とされたことなど間接的影響が考えられた。一方、主要アウトカムである術後肺炎発症率は介入1年目には減少せず、2年目に減少し、3年目に有意な減少を示した。介入開始後時間が経過してから効果が現れた理由として、医科と歯科の連携が徐々に密になったことによる口腔管理プロセスの質の向上が考えられた。

**結論:** 呼吸器疾患患者に対する周術期口腔管理は術後肺炎発症率の減少に寄与することが示唆された。

6. 岩手県内の歯周疾患検診受診率の地域差 - NDBを用いた生態学的研究 -

Regional differences in response rate to oral health checkup for periodontal disease in Iwate Prefecture - An ecological research using NDB -

○杉山 由紀子, 岸 光男

岩手医科大学歯学部口腔医学講座予防歯科学分野

**目的:** 歯周疾患検診は健康増進法に基づいて市町村が実施する健康増進事業である。平成28年から厚生労働省が公表しているNDB<National Database>オープンデータの中に歯周疾患検診の受診状況が示され、利用可能となった。本研究では、岩手県内の歯周疾患検診受診率の地域差を明らかにし、その関連要因を検討することを目的とした。